

203年貯金

7月14日、日銀が、5年4ヶ月ぶりにゼロ金利政策を解除することを決めました。普通預金の金利が0.001%と、銀行に預金するより、筆筒にしまっておいた方が、電車賃だけ助かる、という時代が続いてきましたので、年金や預金が頼りの高齢者にとっては朗報です。一方、700兆円の国債を抱える国、長い不景気からようやく脱け出ようとしている企業、住宅ローンを抱える国民にとっては喜んではられません。ゼロ金利解除の得失は複雑です。

ところで、ゼロ金利解除が発表される前日の13日、東北の河北新報という地方紙にこんな記事が掲載されました。

「大正15年に、当時の宮城県旧白石町長の菅野円蔵氏が100円を町に寄付した。同町長は、これを郵便貯金とし、今後203年間、払い戻しなどの処理をしない、と指示した。以後、同町には『203年貯金の件』という趣意書が、代々の町長に引き継がれ、白石市となった今日まで守られてきている。」

菅野町長の203年貯金の目的は、将来、この貯金の金利によって、町の住民から税金を徴収することなく、町行政を行うことができるようにするという、ことだったそうです。つまり、当時の町の年間予算は10万円でした。一方、郵便貯金の定期の金利が5.04%。そこで、100円を203年間貯金すると、元利合計が212万円になり、その場合の年間の利息が、町の予算を超える10万6000円余りとなる、という計算です。

大正15年といいますと、昭和への変わり目の年。当時の物価をみてみますと、白米が10kgで3円20銭、小麦が1円70銭ぐらい。砂糖1kgで44銭、味噌1kg24銭、醤油1升86銭、塩1kg9銭（ついでに、日本酒が中くらいで1升1円70銭、焼酎1升81銭、ジョッキ1杯23銭）といった時代。給与はというと、公務員初任給で75円、大工手間賃3円53銭（一日当り）だったそうです。これらと比べますと、100円と言うお金は、とてつもなく莫大な金額というわけではなかったかもしれませんが、でも、2年前には関東大震災、そして少し後の昭和4年ごろから昭和の大恐慌が起こり、「大学は出たけれど」などという映画も作られるという、そんな不安な時代が続く中、203年をかけて、無税の町を作ろうという誠にと遠大な計画を立てたわけで、町長の町民を思う熱情が今に伝わってきます。

しかし、その後、日本は、昭和3年、張作霖爆殺事件、同6年満州事変、そして昭和12年盧溝橋事件を経て、日中戦争へ、そして16年、とうとう太平洋戦争に突入し、破滅の道を進みました。終戦の年の昭和20年12月10kg6円だった白米は、翌21年には19円50銭、22年7月には99円70銭、同11月には149円60銭と急騰、100円では10kgのお米も買えないほどに、貨幣価値は暴落してしまいました。

そして、戦後60年、日本は社会的にも経済的にも発展してきましたが、高度経済成長時代、そしてバブルの崩壊、ゼロ金利政策の時代へと波乱万丈の歴史を歩いてきました。菅野町長も、日本の戦争への突入は予想していたかもしれませんが、金利0.001%などというゼロ金利時代が来るなどとは夢にも思わなかったでしょう。しかし、白石町から白石市となった今も、菅野町長の203年貯金は、引き継がれるとともに、「203年据置郵便貯金碑」も建てられ、市民に、貯蓄、節約の大切さを伝えているということです。

ようやく景気回復の確かな兆候も見えて、ゼロ金利解除へ。203年貯金も初期の目的に向かって、再スタートです。ちなみに、203年貯金の元利合計は、現在3535円となっているそうです。